

「春と修羅・第二集」より

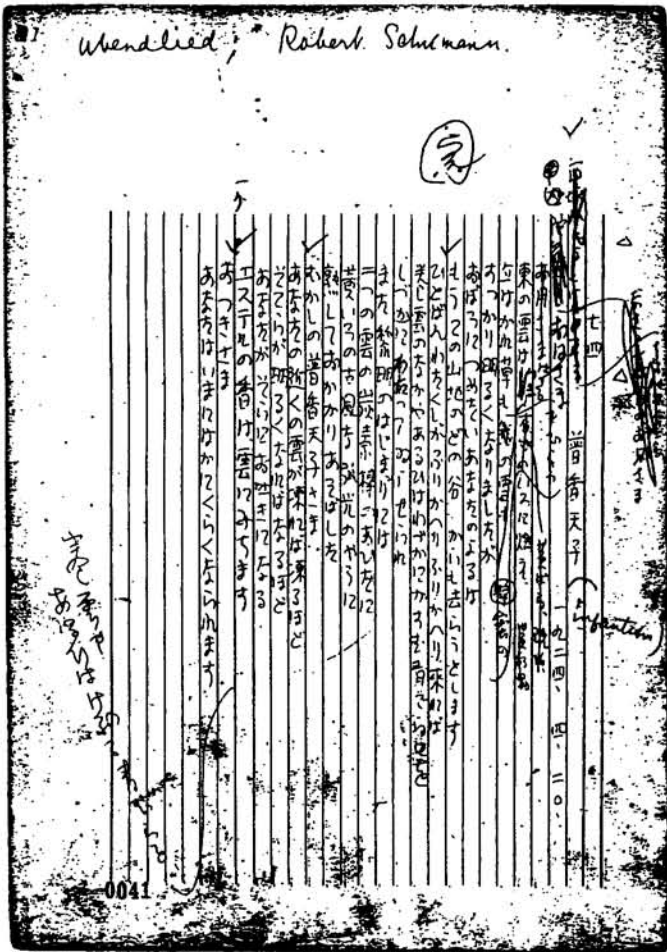
七四 (東の雲はやくも雲のいろに燃え)

東の雲はやくも雲のいろに燃え
 丘はかれ草もまだらの雪も
 あえかにうかびはじめまして
 おぼろにつめたいあなたのよるは
 もうこの山地のどの谷からも去らうとします
 ひとばんわたくしがふりかへりふりかへり来れば
 巻雲のなかやあるいはけふる青ぞらを
 しづかにわたっていらせられ
 また四更ともおぼしいころは
 やゝにみだれた中ぞらの
 二つの雲の炭素棒のあひだに
 古びた黄金の弧光のやうに
 ふしぎな御座を示されました
 まことにあなたを仰ぐひとりひとりに
 全くことなつたかんがへをあたへ
 まことにあなたのもどかな御座は
 つめたい火口の数を示し
 あなたの御座の運行は
 公式にしたがつてたがはぬを知つて
 しかもあなたが一つのかんばしい意志であり
 われらに答へまたはたらきかける、
 巨きなあやしい生物であること
 そのことはいましわたくしの胸を
 あやしくあなたに湧きたゝせませす
 あゝあかつき近くの雲が凍れば凍るほど
 そこらが明るくなればなるほど
 あらたにあなたがお吐きになる
 エステルの香は雲にみちます
 おゝ天子
 あなたはいまにはかにくらくなられます

一九二四、四、二〇、

風がきれぎれ遠い列車のどよみを載せて
 樹々にさびしく復誦する
 ……その青黒い混濁林のつべんで
 鳥が「Tutut」と叫んでゐる……
 こんどは風のけじろい外れを
 蛙があちこちぼそぼそ咽び
 舎生が潰れた喇叭を吹く
 古びて蒼い黄昏である
 ……こんやも山が焼けてゐる……
 野面はげしいかけろよの波
 茫と緑なまばたや
 しまひは黧い乾田のはてに
 濁つて青い信号燈の浮標
 ……焼けてゐるのは達官部あたり……
 また熱らしい雨の風が
 はやしの鼓で砕ければ
 馬をなだめる通かな最低音と
 つめたくふるふ野薔薇の芬気
 ……山火がにはかに二つになる……
 信号燈は赤く狂つてすきとほり
 いちれつ浮ぶ防雪林を
 淡い客車の光廊が
 音なく北へかけぬける
 ……火は雨でも燃えてゐる
 ドルメンまがひの花崗岩を載せた
 千尺ばかりの準平原が
 あつちもこつちも燃えてるらしい
 <古代神楽を伝へたり
 古風に公事をしたりする
 大儀や八木巻へんの
 小さな森林消防隊……
 蛙は遠くでかすかにさやぎ
 もいちどねぐらにははたく鳥と
 星のまはりの青い暈
 ……山火はけぶり 山火はけぶり……
 半響くらい稲光りから
 わづかに風が洗はれる

一九二四、五、四、



「普香天子」下書稿 (宮沢清六氏提供)

(SPレコード Abendlied (R. Schumann) E. Col. 7360) 420 P. Casals

acom. Sons du Soir, Christian Kriens.

Evening Sound

(Sons du Soir C. Kriens 7-7° Violin 田崎瑞博 Piano 佐藤泰平 (録音 1982.12/15))

2003.11.7 T.S. (MLAJ 研究記-2003)

「郊外」(「山火」)の先駆形